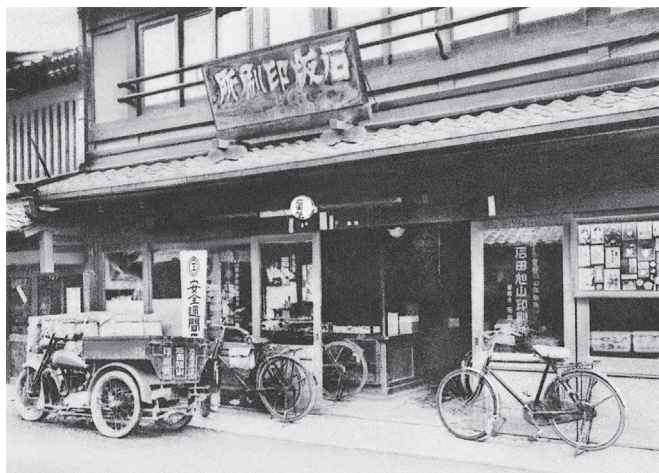


わが社の歴史

～大日本スクリーン製造株式会社～



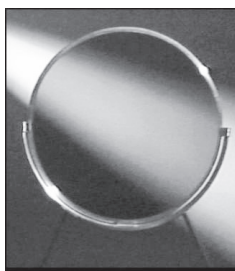
石田旭山印刷所



スクリーン本社昭和28年建設当時

銅版印刷で創業

当社の歴史は140年を超え、1868年の明治元年に遡ります。幕末維新、坂本龍馬が暗殺された翌年、銅版画家の「石田才次郎」（現会長、石田明の曾祖父）が雅号の「旭山」を社名に、京都の街中に開業した銅版印刷会社「石田旭山印刷所」が当社のルーツです。京町家の社屋に工房を作り、下絵を描く「絵師」、下絵から銅版に絵柄を手彫りする「彫り師」、そして顔料で版画印刷する「刷り師」によって、京都の風景画や社寺、観光地図などを印刷販売していました。その後、大正時代になって印刷方式が、より大量印刷に向く大理石を印刷版にした「石版印刷」（脂肪性のインクで逆像の文字や絵柄を描き、薬品で腐食させて印刷用原版を作る）に移行し、多色刷りのポスター印刷なども行いました。しかしながら、写真の印刷再現は手描きでは不可能なことから、当時、高価な輸入品しかなかった写真原版制作に必要な「ガラススクリーン」の国産化に取り組み、大正末期に社内に研究部門を作りました。



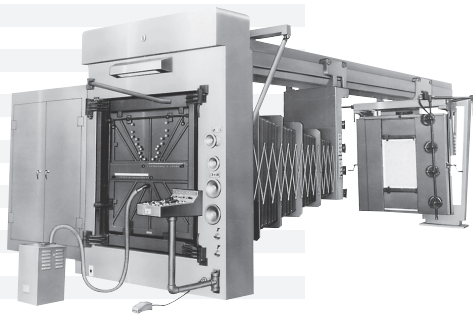
ガラススクリーン

研究部門が社内ベンチャーとして独立

その後、10年以上の開発期間を経て、1934年（昭和9年）に写真製版用ガラススクリーンの開発に成功し、1937年（昭

和12年）に事業化への目途が立ったことから、研究部門を独立させて「大日本スクリーン製造所」が誕生しました。1943年（昭和18年）には株式会社として役員4名、従業員7名、資本金13万円の規模で「大日本スクリーン製造株式会社」が設立され、それが、今日の当社へと発展していくのです。当社は当時の「社内ベンチャー」として誕生した会社だと言えます。

ガラススクリーンとは、薄いガラス板の表面に、1インチあたり65本～200本ほどの細い線を罫書いたものを2枚、線が直交する形で張り合わせたもので、大変な精密さを要求されたものでした。交差した細線のガラスを通して写真原稿を撮影すると、写真画像が小さな点（網点）の集まりに置き変わった原版が得られます。それをインクで印刷しますと、濃淡の階調を再現した写真の印刷ができるのです。ガラススクリーン事業は順調に伸びたのですが、割れるまで使える耐久性の高い製品のため後が続かず、商業向け写真印刷に関わる周辺機器（大型製版カメラ、焼付機、現像機など）を開発し、製造、販売するなど印刷関連機器事業へと展開していきました。時代は石版印刷から金属版印刷へと移行し、金属版を回転させながら感光材を塗布する装置も開発しましたが、その製品は今日の半導体製造用の「スピナー」へと生まれ変わっています。さて、当社創業の事業である「ガラススクリーン」の製造には、精密エッチング技術をはじめ、画像形成技術であるフォトリソグラフィがふんだんに使用され、当社はその技術系をコアと



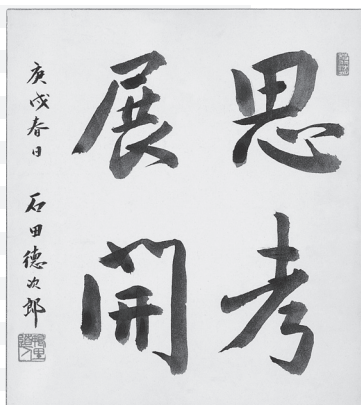
大型懸垂式製版カメラ C-19 (A060502)



ホエラー（1950年代の平型回転式感光液塗布機）

して、その後、印刷周辺機器のみならず、テレビカメラの撮像管に使用する金属メッシュという電子部品やカラーテレビブラウン管用マスク、そして半導体製造装置や液晶製造装置へと事業の多角化を進めてきました。

それらは今で言う「BCP」というより、企業継続へのリスクヘッジという意味合いもあったと思います。ガラススクリーンの製造技術をコアに、印刷、エレクトロニクス分野へと展開していった様子を「亀の甲」になぞらえて、当



思考展開

社の経営スタイルは「亀の甲経営」と呼ばれたりもしました。また大日本スクリーン2代目社長の「石田徳次郎」（現会長、石田明の父）は、当社の事業展開を「思考展開」という理念で表し、そのマインドはその後脈々と受け継がれ、現在では「志高転改」（志を高く、改革に転じる）と同音ながら文字を変えて、「思考展開」と「志高転改」の両輪を社員一同の理念としています。

新経営ビジョン “Fit your needs, Fit your future” で新たな展開を

1989年に当社3代目社長に石田明（現会長）が就任した後、社会の電子化が急速に進み、環境変化のスピードが一層速くなる中、創業の印刷関連機器から半導体、液晶関連事業のウエイトが高まりました。1994年に電子工業用機器事業（半導体、液晶、プリント配線板機器）の売上が印刷関連機器事業を上回り、その後、その差は大きく拡大していきました。当社は事業環境の変化に対応すべく1999年に経営と執行の分離を図り「執行役員制」を導入、2000年から社外取締役を産・官・学の分野から3名招聘しコーポレートガバナンスを強化しています。また2002年から「社内カンパニー制」を導入し、事業の独立採算と迅速な意思決定を強めています。

生産体制では1963年（昭和38年）に開設した彦根地区事業所もスタート当時から30年ほどは印刷関連機器事業の、主に写真製版用カメラやブラウン管用マスクの量産工場として稼動していましたが、今日では半導体と液晶製造装置の主力工場となっています。従業員も協力企業を含め約3000人が従事していますので、工場に隣接して走っている近江鉄道にお願いして事業所構内に「スクリーン駅」を作っただき（2008年）、工場敷地内に電車の駅がある会社、ということで話題にもなりました。生産拠点は彦根のほか



1963年ごろの彦根地区事業所（航空写真）

に京都に2ヵ所、滋賀県に2ヵ所、合計5つの工場があり、中国の杭州には印刷関連機器の中国向け生産工場があります。研究開発拠点は京都の洛西にあり、ここに技術者を集結させてオープンな環境で自社開発、また共同開発を行っています。

さて当社は、京都発の「画像処理」が得意な企業として、過去から「スキャナー」を開発してきました。主にカラー写真印刷用の原版を作成する大型カラースキャナーであったわけですが、その技術を「思考展開」して、2005年に「直立型大サイズスキャナー（人間コピー機）」を開発しました。人物を等身大でスキャナー撮影しますと、最大4億3000万画素の品質で再現できる「超高精細」な等身大プリクラが出来ます。これまでテレビのバラエティ番組に持ち込み、多くのタレントさんや、また協賛しているJリーグの選手とファンとの撮影会に好評を博しました。また人物のみでなく、京都府神社庁と協力して、社寺仏閣に保存される歴史的文化財をスキャンし、デジタルアーカイブを行うなど、当社オリジナルのフラッグシップとして活躍しています。

当社は現在、国内19社、海外24社のグループ企業を有し、連結で5000人ほどの企業となりました。1943年に、役員、従業員含めわずか11名の小さな規模で、写真製版用ガラススクリーンのみでスタートした会社が、紆余曲折を経て印刷関連機器、半導体製造装置、FPD製造装置、プリント配



人間コピー撮影の様子

線板製造装置事業へと「亀の甲経営」で事業を多角化し、2年後の2013年には創立70年を迎えるまでになりました。それに先立ち、本年策定した新経営ビジョン「Fit your needs, Fit your future（期待に応えて、未来を形に・・・）」のもと、大日本スクリーンはこれからも産業と社会、文化の発展に貢献する企業として、ワールドワイドで活躍していきたいと思っています。

(大日本スクリーン製造株式会社 広報室 室長 なかむら 中村 ひろあき 博昭)



現在の本社（京都市上京区）